

琉球大学学術リポジトリ

プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して
ジェンダーへの主体的アプローチ

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: ja 出版者: 琉球大学大学グローバル教育支援機構 公開日: 2022-05-19 キーワード (Ja): ジェンダー, フェミニズム, インターセクショナルリティ, セーフスペース キーワード (En): 作成者: 宜野座, 綾乃 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24564/0002017936 |

プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して —ジェンダーへの主体的アプローチ—

宜野座 綾乃
島嶼地域科学研究所

要 旨

本稿では、本学部の共通教育科目社会学系講義として2019年に筆者が新設した「ジェンダー学とインターセクショナルリティ」の概要を紹介し、誰もが当事者になりうる社会的問題としてのジェンダーを主体的に考察する試みと、その課題について整理したい。特に、フェミニストの視野を取り入れた講義形態にとって重要と思われる、セーフスペースを学生とともに創造し、ポジショナルリティとしての社会的位置の批評的理解に関する取り組みを紹介したい。

キーワード

ジェンダー、フェミニズム、インターセクショナルリティ、セーフスペース

1 はじめに

共通教育科目「ジェンダー学とインターセクショナルリティ」は、新入生から4年生までの学部生を対象とし、ジェンダー学入門レベルの講義として2019年に開設された。新設のきっかけは、私が琉球大学に着任した2018年の時点で、共通教育科目に「ジェンダー」を講義名に含む講義があまり見当たらなかったことや、社会で生きる私たち全員に共通する問題としてのジェンダーを、母校の琉球大学で学生とともに「自分ごと」として考え、学び、議論し、解決に向けての実践を試みたい、という思いであった。学生とのディスカッションを通してまず学んだのは、男女別の家庭での役割分担や期待、教育機関での教師の男女区別意識の学生への影響を始め、ジェンダーの問題は山積していることを、学生自身が経験したり感じていることだった。しかし、社会的に「あたりまえ」であったり、「普通」とされてきた男女の差異に対して問題意識をもちにくいこと、違和感をもって議論の方法を学ぶ機会が与えられてこなかったことが明らかになった。本項では、講義を行う場所をセーフスペース（安全な場所）として創造することの重要性、偏見を超えた学問としてのジェンダー、ジェンダーに関連する問題や課題の主体的分析、そして社会的ジェンダー課題の解決に向けた実践的取り組みに関して紹介し、結びに今後の課題に関して言及したい。

2 学問としてのジェンダー

ジェンダーは、英語単語のgenderをカタカナ表記した用語であり、男女の性別に対して社会

的役割や、意味、特質などを付与する社会化のプロセスで構築される規範のことである。また、この二項対立の図式は平等ではなく、社会的優劣がつけられ現代では男性優位主義を支えるシステムであると言っても過言ではないであろう。このシステムは、家庭、教育、メディア、宗教、経済、政治、軍事といった様々な社会や国家のシステムによって日々維持されている。そのため、「ジェンダー学とインターセクショナルリティ」では、男性的、女性的振る舞いというものは男女が生まれ持った特性ではなく、日々の社会化の過程で学んだものであるという社会学的視点を採用している。例えば、誰もが一度は言われたり耳にしたことがあるであろう、保護者や大人の子への声かけに、「男の子だから泣かない。これくらい我慢しなさい。」「女の子だから、お淑やかにしなさい」がある。これらは、(無)意識的なジェンダー秩序に沿った指導であり、日々これらの声かけをされて育ったものは、生まれ持った男女の性別と男女の性質が一致すべきだと学習し、疑問視しなくなるかもしれない。幼児教育だけではない。高等教育においても、男性参加者がジェンダーにまつわる議論に言及し、「旦那さんの文句でもいいのか」という発言し参加者が笑うという状況を経験したこともあった。この経験は、ジェンダーが確立された学問として認知されてないどころか、男嫌い、対男、取るに足らないという姿勢が、国際的社会問題としてのジェンダー課題を周縁化してしまうこと改めて顕著にした。

私が高等教育を受けた米国では学際的な学問分野としての「ジェンダー学」が確立されている。ジェンダー学は女性の権利獲得運動、つまりフェミニズム運動から出発し、現在では男性学やLGBTQI+の問題を含み、批評的に議論する学問とも言える。これらの経験や理解は、本学の講義を「ジェンダー学」と題し、“学問”であることを明記することの重要性を改めて認識させた。ジェンダーやジェンダー学に対するステレオタイプの脱構築と、方法論や理論を伝える機会が高等教育においてもっと必要ではないかと感じた。

身近な生活の場でも、ジェンダーという言葉が聞こえるようになったが、まだ多くの学生に正しく理解されているとは言い難い概念かもしれない。その理由として考えられるのは、社会生活や教育現場で学問として学ぶ機会がほとんど与えられていない一方で、メディアを中心としたイメージの操作によるステレオタイプがエンターテイメントとして拡散されてしまい、イデオロギーとして内在化され、その概念の持つヘゲモニーや暴力性が不可視化されている状況が挙げられる。例えば、女性の問題だ、女性の問題に注視している、ゲイやレズビアン、トランスジェンダーといった性的マイノリティに限定したり、社会的弱者として周縁化されるごく一部の人のエンパワメントの概念だ、というステレオタイプがある。したがって、マジョリティとして社会化された異性愛者の男性や女性の多くが、自らを非当事者としてジェンダーの問題の外側に置いてしまう状況が生じる。

私は、アメリカの大学で10年ほどジェンダー学の講義を行ってきたが、ほぼ毎回マスキュリンで異性愛者の男性が受講しては、第1回ガイダンスの自己紹介の際、私を始め履修者をからかうように、「女性のことをもっと知りたくて受講している」と面白半分で発言した。残念ながらこのような出来事は決して珍しいことではない。講師が女性で、非白人、非アメリカ人である場合、このような発言をする男性生徒が意識的あるいは無意識に自らを講師や他のクラスメートよりジェンダーヒエラルキーの上位に位置づけ、クラスをドミネートする発言や行為を行うことがある。このような発言や行動は、何百年もかけて規範化され社会化されてきた人種、社会階級、ジェンダー、ナショナルリティ、エスニシティのカテゴリーが絡みあう「インターセ

クシヨナリティ(intersectionality)」によって形成される「ソーシャル・ロケーション(social location、社会的位置付け)」と深く関わっている。世界経済フォーラムが公表した世界156カ国を対象としたジェンダーギャップ指標(2021)によると、米国は30位、日本は120位であり、国際的評価が日本に比べ高い。¹しかし、丁寧に分析すると、トランプ政権で再浮上した白人至上主義や男性中心主義は、白人警察官による黒人への差別的暴力を受けて世界的に広がったBlack Lives Matterの運動や、Covid-19パンデミックをトランプ氏が「チャイナ・ウイルス」と人種化したことによるアジア系アメリカ人への無差別暴力に顕著に現れた。この現象を、本講義のキーワードでもある、インターセクショナルリティ(intersectionality)という概念で考えることができる。インターセクション、交わりを指す概念は、ジェンダーのように社会構築された差別構造である人種、社会階級、セクシャリティ、教育格差、国籍のヒエラルキーや権力関係を考える概念である。白人至上主義の元では、白人がパワーを保持しその権力行使を正当化する概念である点で、ジェンダーとよく似ている。世界の経済的権力者リストを見れば白人男性が上位10位を占めていることから、パワーがジェンダーや人種と分けて考えることのできない概念だということは明らかだ。²世界経済から、医療、国内政治、家庭内分業や暴力、いじめ、自己肯定感まで、ジェンダーとインターセクショナルリティの概念とその分析力を養うことは、より良い社会を創る上で重要であることを、本講義では学生と共に批評的に学んでいる。

上記のアメリカの大学の男子生徒の行為を分析する学問的アプローチは多様だが、「ジェンダー学とインターセクショナルリティ」では、社会的に規範化された彼のソーシャル・ロケーションがどのような社会的プリビレッジ(privilege、優位性)を与えているかという問いを中心に批評的に分析する方法を学ぶ。例えば、男性優位主義、人種や国籍の優位主義、異性愛者の優位主義が考えられる。悪意の有無にかかわらず、このような優位主義を無批評に置き去りにした場合、社会的分類によるプリビレッジを与えられていない学生が安心して講義に参加しジェンダーの問題を検証する機会を奪ってしまったり、沈黙させてしまったり、困難にさせる。そのため、ジェンダー学の講義第1週目に課す課題は、発話主体としての自己の「ソーシャル・ロケーション」に関して作文してもらい、自分の発言はどのような社会的位置から可能にされているか、あるいは不可能にされているかを自己検証する機会から始まる。

その課題の趣旨は、「私(I)」の考える器やフィルターは、社会的機関としての教育、政治、家族、メディア、職場における経験や知識の蓄積の中でどのように構築されてきたかを文字化することある。学生は決まって「一人称で課題を作成していいのですか」と質問する。そのことから、課題や論文の制作が常に行為主体である“I”によって作成されているにも関わらず、“I”の主体性は不可視化され、いかに議論を“一般(論)化”することが学問の基本であるという訓練をされたかが窺える。しかし、フェミニズムの思想では、声を上げる主体が誰なのか、どの立場から語るのか、誰に対して語るのか、ということをはっきりさせるのは、それまで声を上げることができなかったのが誰なのか、誰の声が社会に反映されていたのかを明らかにする上で不

¹ World Economic Forum. 2021. Global Gender Gap Report 2021.

https://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2021.pdf

² Forbes. 2021. The World's Real-Time Billionaires. <https://www.forbes.com/real-time-billionaires/#6969bcd33d78>

可欠であったし、誰がどのポジショナリティから、誰を、あるいは何を、どう語っているかは、当事者と非当事者の関係を探る上でも不可欠である。ジェンダーの問題は、誰もが当事者であり、非当事者にもなりうるという点からも、語るIのポジショナリティの認識は重要である。また、一般化、一般論、「普通」、「当たり前」を深く探ってみると、それらの言説の多くは、社会的にマジョリティーとされてきた者の視点であり、マジョリティーがマジョリティーに停滞するためのシステムであることもわかっている。私の講義では、それを一度解体してみる訓練をまずは、Iの社会的場所(social location)から始めている。

3 セーフ・スペース(safe space)

すでに述べたように、ジェンダーの課題は、意識的であるか、または性的マイノリティであるか、マジョリティーであるかに関わらず、現代社会に生きる誰もが関与する問題であると言える。男女の二項対立の構造が「当たり前」として社会化された我々にとって、疑問を投げかけにくい問題でもある。男女の二項対立が「普通(natural)」とされる社会では、違和感を感じても物申しが非常に困難で、勇気を持って批評すれば社会グループから阻害されたり自己肯定感をも傷つけられる可能性がある。従って、私の講義で、理論や方法論を享受することと同等あるいはそれ以上に重要だと考えるのは、「セーフ・スペース」、つまり安全な場所を学生とともに創り維持していくことだ。ここでの安全な場所とは、自分の思考や発言のソーシャルロケーションとの関連性の上で批評的に考えた上で、異なるソーシャル・ロケーションを持つクラスメートの意見に耳を傾け、自分の「あたりまえ」とクラスメートの「あたりまえ」が異なっているのは、ソーシャル・ロケーションにどう起因するのかという問いを行い、その過程における意識的で理論的な努力による協働作業で創造される空間である。

2019年度に行った本講義では、「聞ける」こと（語り手が語り始める奥深いソシアル・ロケーションを想像しながら理解しようとする姿勢）の重要性を講義やディスカッションを通して学び、経験しながら、実践してもらいたいと思っていた。そのために、お互いのソーシャルロケーションを尊重しながらコンストラクティブな批判方法を身につける訓練を行った。2019年の講義では、通常の講義等での対面授業を行っていたため、3-5人の少人数によるグループディスカッションを毎回のようを持ち、個人の経験（知）の共有から始まり、その背後にある教育、家庭、労働、メディア、健康といった日常におけるジェンダーの絡繰を理論を駆使して議論をしてもらった。講師として私は必ず各グループのディスカッションに耳を傾け、必要に応じて議論に参加した。また、セーフスペースが確保されているかを確認することを繰り返し、一人一人の学生が個性を持った個人としてお互いを尊重しながらディスカッションを行えるよう、お互いの名前を覚えてもらうことも重要視したので、20名ほどの規模で行えたのは適切だったと思う。15回の講義の時間は、各回のテーマに則したテキストをあらかじめ精読し講義に参加してもらい、学生はリクスペーパーを日英何かで作成し、講義では、リーディングプレゼンテーションを行うという、学生主体のアクティブラーニングを心がけた。

4 ファイナル・プロジェクト、「自分にとって一番大事なこと」を課題に

マイノリティの問題意識と行動から生まれたフェミニズムに起因する「ジェンダー学とインターセクショナリティ」を受講し半年間という短い期間で学んで欲しいことは、次の三点である。一点目に、個人レベルの違和感やプリビレッジが、どう社会的な問題と結びついているかを理論や方法論を用いて検証できることである。二点目は、その問題の解決方法を自分なりに具体的に考察することである。そして、三点目が、解決に向けて実践することである。ファイナル・プロジェクトと題した最終課題は、学生がその三つを行えるようにデザインした。事例として、卒業後教員を志望する受講生は、小学生を対象としたジェンダーに関する一コマ分のワークショップ指導案を作成した。建築を専攻する4年次の学生は、ジェンダーフリーのトイレのデザインとコンセプトを打ち出した。また別の学生は、甥っ子に向けたジェンダーに関する絵本を作成した。フェミニズムの一つの特徴として、行動する学問ということが挙げられると私は考えている。講義を通して、学生には講義の最終目標は、ジェンダーにまつわる「自分にとって一番大事なこと」を課題として設定し、創造的な解決方法を探求することだと伝え続けていた。毎回の講義ではテーマの紹介、学生同士のディベート、意見交流、実践を考える時間を設け、最終プロジェクトの準備を行った。

5 今後の課題と改善点

改善点としては、ジェンダー学の出発点となった欧米諸国のフェミニズムに関する原文を読むこともあり、英検準1級レベルの英語力を要求していたことが挙げられる。そのため、英語をあまり得意としない学生にとっては、ジェンダー学を学びたくても英語への苦手意識から、受講を断念したケースもあったようだった。このような学生には、スタディーグループなどを設置したり、オフィスアワーを充実させることによりサポートができるよう改善したい。

沖縄という地で琉球大学の学生とともに、沖縄のジェンダー問題に関して議論できた上に、このような賞をいただけたことを大変光栄に思う。心よりお礼を申し上げたい。